

## (2) 知事あいさつ

皆様こんにちは。コウチ・アグリマネジメント・クラブの皆様方におかれましては、本日、この「対話と実行」座談会に応じただけましたことを心より御礼を申し上げます。

また、先ほども圍場を見させていただきまして、活発かつ先端的な取り組みに、大変感銘を受けたところであります。本当にありがとうございます。

コウチ・アグリマネジメント・クラブの皆様方は、高知県の中でも非常に先端的な農業経営をしておられ、しかも、単に農業を法的な形態でやるというだけではなく、関連の加工、さらには観光を含め関連産業にも進出され、発展を遂げてこられておられます。皆様方からいろいろとお知恵を賜ることで、今後の農政のあり方に大いに反映をしていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、私の方から、この産業振興計画の中で、農業、特に担い手の育成、経営発展の関係、どういうことをやろうとしているかについてお話をさせていただきたいと思います。

お手元に、高知県産業振興計画バージョン2というパンフレットをお配りしております。

(<http://www.pref.kochi.lg.jp/~seisui/keikaku/index.html>)

7ページ、3番「(産業振興)計画の構成」のページの中段のところに、産業振興計画の全体を表した図があります。左側の「産業成長戦略」とは、農業、林業、水産業、商工業、観光及び地産外商戦略のように分野を越えて連携していく課題、それぞれについて施策を実施するもので、全部で344の施策があります。そして、右側の地域アクションプランとは、それぞれの地域の強みを生かして地域での事業化を目指していく238のプランがあります。

この産業成長戦略の中でも、農業は高知県にとって非常に強みのある分野で、この一次産業を起点とし、関連産業を育てていくという、一次産業の強みがあります。その一次産業のシェアを更に伸ばしていく。得意技をさらに伸ばし、そのうえで関連の産業も育てていく。例えば加工であるとか、この農業を生かした観光であるとか、そういう全体としての富士山のような姿を是非つくりあげていきたい。そういう産業基盤をつくりあげていくことによって、それをベースとして、県内だけにとどまるのではなくて、地産外商ということで県外に物を売り込みに行って、県外から外貨を稼いでくる。そういう取り組みを続けていきたいと、目指していくのが、この産業成長戦略、そしてこの農業の分野ということになります。

この担い手の育成と生産資源の保全として、認定農業者の育成などとともに、新規就農者の確保・育成というところに非常に力を入れております。実践研修などについて、手厚く支援していくとか、更には耕作放棄地の解消・担い手とのマッチングということで、農業公社、JAのいろいろな雇用相談などもタイアップをさせていただきながら、新しく就農しようとする方々に対して農地を紹介する。更にもっともっと研修をしていただく。そういうような取り組みの推進を行なっているところです。

上にもありますように、生産から流通、販売までの一元的支援体制の構築。いかに有利販売を図っていくのかという取り組みについて思うのは、県外向けに物を売っていく時に、県外の量販店の売り方というのが、変わってきているところがあるということです。県外の量販店では、それぞれの農家の顔ができるだけ見えるような形での販売というのを非常に推進してきているということです。高知県の農業の生産から流通・販売に至るまでを、そういうものに対応できるものとしていかなければなりません。いつまでも従前のやり方だけに固執しては、いずれ時代に置いて行かれるので、そういう新しい方向というのを見つけていくべく努力しているところです。

地域アクションプランの全238事業の中でも、農業関係のプランが非常に数多くを占めています。例えば、この高知市地域をご覧くださいと、「春野地区の農産物の付加価値向上」とありますが、この春野の園芸の強みを生かした形で何とかもっとこれを伸ばしていけないかと、こちらアクションプランの一環として入っているものです。

また、より具体的な形でこの地域のアクションプランの取り組みとして、「地産地消・地産外商」、「食品加工」という形でそれぞれ区分していますが、例えば食品加工の部分では、「米粉の里 嶺北」としてお米で米粉をつくって、うどんにする、米粉そのもので売る、場合によってはパンにするとか、そういう取り組みを進められており、今後は、例えば米粉専用の米を作って、それで生産を拡大していこうという取り組みも目指しているということです。

さらには、「芋菓子のブランド化」として、もっと芋を使っているような加工品、お菓子をつくっていこうということで、芋は今まで県外からのものでした。大月町で以前タバコを作っていて、現在耕作放棄地となっていたところに鹿児島から苗を持ってきて、新しく芋を作って日高村の工場加工して販売をするといった取り組みも進めようとしているところです。段々、少しずつ新しい雇用と所得を生み出す、そういう取り組みも始まってきたところです。

観光関係では、観光というものをもっとうまく生かして、それぞれの地域において体験農園の取り組み、または映像、映画などでとられた農園、農地、そういうところをうまく売り出していこうという取り組みも行なわれようとしているところです。

最後に「担い手の育成・確保」として、それぞれ相談段階から最終的な経営発展の支援の段階に至るまで様々なメニューを設けてあります。例えば、県外にも出て行き、就農のアピールをするということもありますが、特に事実上農業への参入障壁ということになるだろうと思われる部分、非常に高度な技術が要る、誰でもすぐ出来るというものではないというところについて、この技術の修得段階にかなり手厚く支援を行うということにしています。

コウチ・アグリスクールで研修するというのもありますが、併せて篤農家の皆様方にご協力を賜り研修をしていただく。そのために研修生には、県と市町村あわせて月15万円までお金を出す。受け入れていただいた篤農家の方には、経費が増えた分に対応したも

のとして5万円お金を出ささせていただくような取り組みも今、実施しています。

あわせて営農準備段階において、土地がないから農業ができないという方も結構いらっしやる、他方で耕作放棄地はたくさん発生をしております。耕作放棄地や空きハウス、この情報を農業公社のほうで集約しまして、新たに就農されたいという方に対してマッチングをしていく、そういう取り組みをできるかぎりしていきたい。また、レンタルハウス、こちらに対して一定程度の補助を行い、それによって初期投資を軽減するとか、そういう取り組みを今、進めようとしています。

こういう形で担い手の確保について、一定昨年ほうまくいきました。通年110人ぐらい就農しているところ、これが昨年は160人になった。これは、法人からの参入が進んだということもあって、増えた訳ですが、もっともっと増やしていきたい。強みの中の強みである農業ほど、担い手がどんどん減ってしまっている現状。今のままでは10年後には、高知県、「農業が強みです」とさえも言えなくなってしまうかもしれないということに非常に危機感を持っています。

この農業について、より近代的な経営、より法人的な経営、こういうものが発展をしていくことにより、経営的な競争力も持った農業基盤というものが県内に行き渡っていくことが一番の理想なのだと考えています。

県立農業大学校の生徒の皆さん達に、よく申し上げるのですが、「これからの農業のイメージって何ですか」と言われた時、一言で言えば農業をやりよったら“かっこええ”と、そういう時代がこれから来るのだと、そういう時代の担い手になってもらいたいということをおは申し上げています。先ほど行かせていただいた圃場もかっこいいですよ。こういう、若い人達がどんどんそういうところに就職したくなるような、そういう農業、これが県内にどう広がっていくか。これは非常に大きな課題なのだと思います。

オランダとも協定を結ばせていただき、新しい農業というものを学ばせていただいています。何よりも今日お越しの皆様方は、県内でも最も進んだ農業展開をしていらっしやる皆様方です。今日、この「対話と実行」座談会を通じて多くのことを学ばせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。